

なのである。チョコレートは欧州発とされているが、チョコレートの原料カカオは中南米産であり、古代メキシコのアステカ族はカカオ豆をアステカ文明の神ケツアルコアトルの授けた万能薬として珍重していたそうである。

メキシコの高原都市は美しい。ぜひ、美しいコロニアル・シティーを訪れて、宗主国スペイン生まれのチョコロスとメキシコの植民地時代以前の伝統を受け継ぐチョコラテを味わってみてはいかがでしょう。メキシコの歴史の一端が感じられると思います。

最も長い英単語

経営学部
安藤 聡

ある日レディングからベイズィングストウクに向かうローカル線にひとりで揺られていた。終点に近い小さな駅から、妙に背の高い労働者階級風の青年が乗ってきた。車内は空いていたが、青年は何故か私と向かい合わせの席に座った。だがもうすぐ降りるのだし、この手の連中はどうせ聞き取りにくい英語を話すに決まっているので、話しかけられると面倒だから私は彼と目を合わせないようにしていた。すると唐突に彼は、「一番長い英単語は何か知ってるか?」と問いかけて来た。訛りは強いが聴解に支障を来すほどひどい発音でもなかった。私は聞こえないふりをすることなく会話に応じることにした。「floccinaucinihilipilificationだろ」と私が答えると、青年は「違う、

antidisestablishmentarianismだ」と言う。私は floccinaucinihilipilificationの方が一文字多いこと（前者は29文字、後者は28文字）を知っていたので、彼の思い違いを正してやろうとしたが、彼の方から矢継ぎ早に「どこから来た?」とか「留学か、仕事か?」などと質問を連発して来たので、「日本からだ」、「仕事でレディング大学に来ている」などと答えているうちに列車はベイズィングストウクに到着してしまった。青年は「話が出来て楽しかったよ」と言い残して去って行ったが、私には釈然としない気分が残った。

この floccinaucinihilipilification という語は18世紀の詩人・随筆家ウィリアム・シェンストン(1714~63)の造語と考えられている。意味は「軽視すること」、「無価値と判断すること」である。シェンストンは1741年のある日友人宛に書いた手紙の中である人物について、「私が彼を好きだったのは、とりわけその金を何とも思わない態度のゆえだ。」(I loved him for nothing so much as his flocci-nauci-nihili-pili-fication of money.)と書いている。ここでこの詩人はハイフンを入れて綴っているので語源がよりいっそう明確になるが、flocciはラテン語で「羊毛の房」から転じて「軽いもの」とか「価値のないもの」、nauciは同じくラテン語で「つまらないもの」、nihiliもラテン語で「無」(参考までに'nihilism'は「虚無主義」)、piliは「毛」から転じて「些細なもの」、-ificationは「~化すること」である。つまりシェンストンが手紙の中で言及している「彼」という人物は、金というものを「一房の羊毛か一本の毛のごとく軽く、取るに足らない無価値なもの」と判断していたのである。シェンストンが何故このような単語を思いついたかという点、一説によれば、名門パブリック・スクールであるイートン・コレッジのラテン語の単語帳に、「flocci」、「nauci」、「nihili」、「pili」がこの順序で並んでいたことに由来するという。そう言われて見ると、確かにアルファベット順になっている。

おそらくはシェンストンの書簡集を読んで真似たのであろうが、詩人口バート・サウジー

(1771~1843) は1816年に季刊誌『クォーターリー・レヴィウ』に寄稿した記事の中でこの単語を使っている。但しこの用例は『オクスフォード・イングリッシュ・ディクショナリー』には引用されていないし、その季刊誌も手許にないのでここにその例文を紹介することは出来ない。一方で小説家ウォルター・スコット (1771~1832) は1829年3月18日付の日記の中でこの語を3回用いているが、3回とも間違えて7文字目の'n'を'p'と綴っている。『OED』に引用されているのはその日記の中の次のセンテンスである。'They must be taken with an air of contempt, a floccipaucinihilipilification [sic] of all that can gratify the outward man.' この文脈で'they'とは「葉巻とウィスキー」であり、そういったものを人は「軽蔑を込めて嗜むべきであり」、つまり「人間の外面的な肉体を喜ばせるようなあらゆるものに対する軽視」が必要だと、スコットは主張しているのである。

他方のベイズィングストウクの一青年が一番長いと主張する *antidisestablishmentarianism* は、強いて言えば「反国教会廃止論」ということになる。国教会を廃止しようという主張に対する反対論、である。この語の意味を考えるには、まず中心にある 'establishment' に注目しなければならない。ここでは「イングランド国教会」を指す。そもそもこの宗派は、悪名高きヘンリー八世が妻と離婚して愛人と再婚するために設立したものである。大英帝国が世界に君臨した19世紀には、国教会の制度そのものにさまざまな矛盾が露呈するようになった。そこで国教会の解体を主張する人々や、そこまで行かなくとも現状維持に反対する人々が現れた。この人たちがこそが *disestablishmentarian(s)* であり、こういう人たちの思想・主義が *disestablishmentarianism* である。そうなるとう当然、そのような考えに反対する人々、つまり国教会を擁護する立場の人々も黙ってはいない。このような人々の思想・主義が *antidisestablishmentarianism* なのである。

これら二つの単語は『OED』初版に収録され

た語彙のうち長いものの第一位と第二位であった。『OED』第二版にはこれらより長い語がいくつか収録されていて、そのほとんどが医学用語である。例えば *floccinaucinihilipilification* よりも一文字分だけ長い *pseudopseudohypoparathyroidism* というのがあり、遺伝性の骨格の障害の一種らしい。日本語でこの疾患を何と呼ぶのかは私には判らない。また、これは長い単語としては割にポピュラーなものだが、*pneumonoultramicroscopic-silicovolcanoconiosis* という病名があり、『プログレッシブ英和中辞典』(小学館)にも収録されている。日本語では「珪性肺塵症(けいせいはいじんしょう)」と呼ばれ、炭坑夫が罹りやすい病気だそう。『プログレッシブ』には「実用的な英語では最長単語とされる」と記されている。これは45文字あり、これまで挙げた例よりも圧倒的に長い。病名はたいていラテン語をつなげて作られるので、理論上はいくらでも長くなり得る。実際に『OED』にこそ掲載されていないものの、1913文字からなる病名も確かに存在するらしい。そのようなわけで、『プログレッシブ』には悪いが、「一番長い単語」というときには病名は除外しないと面白い。

『OED』第二版に収録された *floccinaucinihilipilification* よりも長くて病名でない単語としては、34文字からなる *supercalifragilisticexpialidocious* を挙げるができる。しかしこれも「無意味な語」と定義されていることから、正統な「最長単語」とはみなさない方がよかろう。これはディズニー映画『メアリー・ポピンズ』(1964。ちなみにこの映画はP・L・トラヴァーズの原作に対する冒涇でもある)の中でジュリー・アンドリュースがまじないの言葉として歌って有名になったものである。語尾が '-ious' で終わっているから形容詞であろうが、「無意味」とはいえ『OED』の定義では「大いなる是認を表わす」とされているので「素晴らしい」くらいの意味はあるのであろう。無意味な言葉としてこの映画以前から主に子供らの間で使われていたという。また1951年に発表されたフォークソングに 'Supercalafaja-

listickespeealadojus; or the Super Song' というタイトルのものがあり、この作詞者（パーカーとヤングという二人組らしい）は1965年にこの語の著作権を主張してディズニー・プロダクションを訴えた。しかしそれぞれが似ているようで微妙に異なっていたことから、結局は原告敗訴に終わった。また1971年11月6日付の『デイリー・テレグラフ』紙ではこの単語が次のように使われている。'If you can stand more than a day of supercalifragilisticexpialidocious entertainment you can settle in at the concrete Contemporary Resort Hotel.'

固有名詞を含めれば、これまでに挙げた例よりも長いものはいくつかある。有名なのはウェイルズの地名 Llanfairpwllgwyngyllgogerychwyrndrobwlllantysiliogogoch (58文字) であろう。尤もこれは二つの村が合併して両方の名前をそのままつなげたためにこれほど長くなったのであり、前の39文字（それでも十分に長い）と後ろの19文字（それでもまだ長い）に分けられる。途中のエルが4文字連続するところの中間がその切れ目である。地図上では最初の12文字のみ表記されるか、あるいは Llanfair P. G. と略されることが多い。だがかつて一週間だけ、ウェイルズにはこれより長い地名が存在したことがある。それは2004年7月のことで、チェスターの南西にある Llanfynydd（敢えてカタカナで表記すると「サンヴァニッツ」ということになるが、最初の「サン」はウェイルズ語特有の音、最後の「ズ」は英語でいう 'th' の有声音である）という村が一週間に亘って、Llanhyfryddawelldhynafolybarcudprindanfygythiadtrienusyrhafnauole と、公式な地名として名乗っていたのである。数えてみると66文字あるから、Llanfairpwllgwyngyllgogerychwyrndrobwlllantysiliogogoch よりも8文字長い。この改名は、風景美と絶滅危機種の動植物を併せ持つこの地域に、寝耳にミミズのごとく風力発電所建設計画が持ち上がったことに端を発する。発電所建設に反対するための運動を世にアピールすべく、その存在を目立たせるためにわ

ざと長い名前を名乗ったということである。ちなみにこの長い名前の意味はウェイルズ語で「卑劣な羽根（刃）の脅威に晒された稀少な鷹の棲む歴史的に重要な教会があるきわめて美しい村」であるらしい。いずれにせよ固有名詞ということになると、これもいくらかでも長くしようと思えば出来るので、最長単語としては面白味に欠けると言えよう。

長い単語といえば他にも、同じ文字を二度繰り返さないという限定つきの最長語として、dermatoglyphics と uncopyrightable（いずれも18文字）がある。前者は「掌紋学」（手のひらの皮膚の隆起に関する研究らしいが、手相占いとは違うと思う）、後者は「著作権を取ることが出来ない」という意味である。また、古典的なジョークとしては、最長の単語は smiles である。なぜなら最初と最後の s の間に1マイル（約1.6キロ）の距離があるから。それならば beleaguer の方が be と r の間が1リーグ（約4.8キロ）だからこっちの方が長いではないか、という反論もあるが、前後の文字が同一でないし、リーグといわれても俄にイメージできないので、smiles ほど面白くない。こういう話は事実として長いかな否かよりも、面白いかどうかの方が重要なのである。



ベイズィングストウク駅（ハンブシャー州）